

文化

小学生の私が初めてタイ国のバンコク市で暮らし始めた時、一九六〇年ごろだが、ズック靴がなくて困ったことがある。日本から持って行った洋服やオモチャを自宅の火災で失ったからだ。だが、通っていた日本人学校で履くズック靴が、当時のバンコクでは手に入らなかった。建物も四―五階建てがせいぜいで、高層ビルが立ち並ぶ現在のバンコクとは全く違う風景

小学生的の私が初めてタイ国のバンコク市で暮らし始めた時、一九六〇年ごろだが、ズック靴がなくて困ったことがある。日本から持って行った洋服やオモチャを自宅の火災で失ったからだ。だが、通っていた日本人学校で履くズック靴が、当時のバンコクでは手に入らなかった。建物も四―五階建てがせいぜいで、高層ビルが立ち並ぶ現在のバンコクとは全く違う風景



日本の歌遊びをタイの子どもたちに教える筆者たち

解説した絵本も付けた。バンコクの裕福な子供は、日本の子と同じようにゲーム機で遊んでいる。でも農村には、オモチャなどない。私自身の子供時代も、タイ国では何もなかったから日本の「歌遊び」をよくやった。それを分かち合いたいという気持ちもあった。

皆が輪になって歌いながら隣の子供の動作をまねる「羅漢さん」は、母から習った遊び。日本でも知っている人は今や少ないのではないだろうか



住田 千鶴子

◇父の遺志継ぎ、現地の子供に遊び伝える◇

日本の童謡 タイにこだま

タイ語に訳したCD
両親が「タイはいい国だよ」と言い続けたからだろうか。ここが嫌になることはなかった。そして今、私は日本とタイの交流活動に取り組んでいる。ボランティア・グループ「コープケン・マーク」というNGO(非政府組織)で、学校に文房具を贈ったり、図書館を建てたり、タイの民芸品を販売したりしている。でも貧しい国を支援する、という意識はない。仏教のタイでは、人々が日常的に寺院や各種支援

団体に寄進や寄付をする。現地では当たり前のことなのだ。昨年は、タイの小学校に日本の童謡に親しんでもらうセットを贈った。長く気になっていたの

が、タイには子供の歌が少ない。日本の童謡をタイ語に訳して歌ったCDを作り、百二十校ほどに配った。収めたのは「あなただとごさ」「かごめかごめ」「花いちもんめ」など十二曲。歌いながら身体を使って遊べるものを選んだ。遊び方を

母から習った遊び
学校に出かけて説明すると皆、大喜びでやる。でも、意外にうまくできない。例えば「あなただとごさ」を歌いながら、まりつきをするのはできず、途中、ボールの上を片足でまたぐところが失敗する。昔ながらの子供の遊びは、意外に運動神経を使うのだ。子供に発達を自然に促すようにできていることに、改めて気付かされた。

か。それがタイに残ってくれたら、本望である。私の父は、第二次大戦前からタイ国で働いていた。戦後は日本に戻り、結婚して私が生まれた。がやがてタイに戻った。本当にこの国が好きで、日本との友好をいつも夢見ている人だった。

私は高校までタイで暮らし、米国や台湾の大学で学んだ。一方で日本をほとんど知らずに育ったので、八三年に帰国。東京アイズニランドを経営するオリエンタルランドに就職した。でも職場や近所の人にタイのことを話すと、台湾と勘違いされたり「植民地だったところじゃないか」といわれたりする。タイはアジアでは数少ない植民地経験のない国である。

そこで、まず暮らしていた千葉県浦安市で民芸品の展示会を始めた。徐々に仲間が増え、九一年に今の団体を作った。「コープケン・マーク」はタイ語で「ありがとうごさいます」の意味だ。ところが二〇〇〇年、私は再びバンコクに戻

る。ここで暮らし続けた両親が弱ったためだ。しかも母の「まだまだ私もあなたもタイを知らないわね」の一言で、現地にカルチャー・センターの設立を思いついた。日本とタイの人々が、互いの言葉や料理などの文化を学びあえる場所である。今はバンコクでセンターを運営しながら、日本のNGO活動も続けている。

国際交流の原点知る
タイの人々は宗教心が厚く、慎ましくて親孝行だ。ゆえに自己主張できないところもあるが、日本人が失いかけた美徳を、四つの国に囲まれて、

さまざまな文化が入り交じっている。五月十、十一日に代々木公園で「タイ・フェスティバル」が開催され「コープケン・マーク」のブースも設ける。興味のある方は立ち寄っていただきたい。

日本の童謡をタイで教えた時、子供たちにも私たちにも笑いが絶えなかった。国際交流の原点は、笑顔や楽しさと感じ入った。通訳や広告代理店などの仕事で二つの国の橋渡しに生きた父。その志を、気が付いたら私が継いでいた。それが運命なのだと思っ

た。通訳や広告代理店などの仕事で二つの国の橋渡しに生きた父。その志を、気が付いたら私が継いでいた。それが運命なのだと思っ

た。通訳や広告代理店などの仕事で二つの国の橋渡しに生きた父。その志を、気が付いたら私が継いでいた。それが運命なのだと思っ

た。通訳や広告代理店などの仕事で二つの国の橋渡しに生きた父。その志を、気が付いたら私が継いでいた。それが運命なのだと思っ